

令和7年度入学試験問題

総合問題(教育支援専門職養成課程・心理コース)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答はすべて別紙解答用紙に記入下さい。
3. 解答用紙は3枚です。
4. 解答方法が論述方式の場合は、1マス目から書き始め、1文字空けた
り、改行したりせずに横書きで書き進め下さい。
5. 各解答用紙には、受験番号を記入する欄がそれぞれ1箇所あります。
すべて記入下さい。
6. 試験終了後、問題冊子は持ち帰り下さい。

次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

「わたしは文字がうまく読めません」

もしも皆さんが、子どもからそう言われたら、どんなことを考えるでしょうか。

本を読むのが好きじゃないのかな？ 漢字が苦手なのかな？ 人前で声を出して読むのが恥ずかしいのかな？ そんなふうに思われるかもしれません。

けれども、理由はそれだけではないのです。(中略)

文字が重なって見えたり、似た字の区別がとっさにできなかったり、文字を見ても何と読むのか一瞬考えてしまったり。教室で順番に朗読するような場面だと焦るあまり、文字がゆらいだり、ねじれたり、反転して見えることさえあります。

こうした障害を「ディスレクシア」(発達性読み書き障害)^{注1)}と言います。

ディスレクシアは、文字をすばやく、正しく、疲れずに読むことに困難のある、学習障害の一つです。そのメカニズムは、まだ完全にはわかっていませんが、脳の音韻処理を司る機能に障害があると考えられています。

専門家による調査では、日本語話者の5～8%がディスレクシアであるという報告がなされています。これが正しければ、1クラス(35人)のうち2～3人の子どもは、読み書きに何らかの困難を感じていることになります。

耳慣れない言葉だと思われるかもしれませんが、それだけ“隠れディスレクシア”^①の子どもたちが、身近にいる可能性があるのです。

また、よく誤解されやすいのですが、ディスレクシアは、知能レベルや勉強不足(知識の欠如)が原因ではありません。会話をするだけなら全く問題ありませんし、話の内容も理解できます。ただ、会話を文字にすること、文字を読み上げることに大きな苦勞を伴います。

そして普段の会話や理解力には問題がないだけに、ディスレクシアの子どもは「(やればできるのに)勉強のやる気がない子」「漢字が苦手な子」「読書が嫌いな子」といったレッテルを貼られがちです。

先生や親からは「もっと頑張りなさい」と言われます。

でも、頑張っても努力してもなかなか上達しない。読みたくても書きたくても、周

りの友達のようにすらすらと読めるようにはならない。(中略)

ディスレクシアと同様に、ロービジョン^{注2)}も見え方はさまざまです。時間をかけたり、文字を拡大したりすれば読める子もいる一方で、視覚を補助する機具や機械に頼らないと文字を読めない子もいます。

2007年に日本眼科医会が調査した推計によると、現在、国内には約164万人の視覚障害者がいます。そのうちの8～9割にあたる145万人がロービジョンなのだそうです。

程度にもよりますが、普通学級では学習に支障があるため、専用のサポートが受けられる特別支援学級や視覚支援学校に通う子も多くいます。

日本の識字率は、ほぼ100%とされ、ほとんどの人が文章を理解して読み書きできると考えられています。でも実際には、文章の内容は理解できても、文字を読んだり書いたりすることに苦労している子どもたちがたくさんいる。それも私たちのとても身近に、人知れず悩んでいる子どもたちがいるのです。

その事実を知ったとき、私は驚き、ショックを受けました。

そしてこの衝撃こそが、私を「UD^{注3)}デジタル教科書体」の開発に駆り立てる、大きな原動力となったのです。

ご紹介が遅くなりました。私は「書体デザイナー」という、あまり聞き馴染みのない仕事をしています。

大学を卒業してから32年近く、デザイナーとしてたくさんの書体を開発してきました。今はモリサワという会社で今まで書体をあまり意識していなかった教育現場や自治体などを中心に、書体の重要性や役割、その使い方のポイントなどを書体デザイナーとしての経験を活かして普及、推進する仕事をしています。

書体とは、同じコンセプトでデザインされた文字の集まりのことです。スマートフォンやパソコンで文字を打つことが当たり前となった現代では、「フォント」と言うほうが、聞き慣れているかもしれません。「フォント」とはパソコンで使えるよう、デジタル化された書体のことです。

世の中には、無数の文字があふれ返っています。そして、その文字の一つひとつがデザインされていて、必ず何かの書体のカテゴリーに当てはまります。(中略)

2016年にリリースされた「UDデジタル教科書体」も、そんな数ある書体のうち

の一つです。

ただ、ほかの書体とは、決定的に違う部分があります。

それはUDデジタル教科書体が、健常者の子どもたちだけでなく、ロービジョンやディスレクシアの子どもたちにとっても、「見やすく、読みやすく、間違えにくく、伝わりやすいこと」を目指して作られた教科書体であるということです。(中略)

これは後ほど詳しくお話しますが、実はロービジョンの子どもたちが苦しめられているのは、「文字の小ささ」だけが原因ではありませんでした。教科書体の特徴である「とめ・はね・はらい」などの線の流れ、独特の線の細さ、書体ごとの形の違いなど、「文字を習う教育現場」だからこそ無視できない課題が山積していたのです。

それを知って、私は「これは社会の穴だ」と思いました。書体デザイナーとしても今まで気づけなかったことを申し訳なく感じました。

同時に、書体デザイナーとしての闘志が、心の底からめらめらと湧き上がるのを感じました。

読める文字がないのであれば、作ればいい。(中略)

UDデジタル教科書体の完成から3年が経った頃、私は仕事の関係で、障害のある子どもの教育や就労を支援している会社を訪れました。

そこでは発達障害、学習障害、ダウン症といったさまざまな困難を抱える子どもたちを支援する学習教室を運営していたのですが、あるベテランの女性スタッフの方が、こんな話をしてくれました。

「うちの教室に、ディスレクシアの小学生の男の子がいるんです。その子は普通の本や教科書では文字がうまく読めなくて、『どうせおれには無理だから』って、いつも途中で読むのを諦めていたんです」

その学習教室では、男の子のために、マルチメディアデジタイズ教科書(パソコンなどで文字の拡大、文字や背景色の変更、音声再生などが行える教材)を使って、授業を行っていました。

しかし、それでも彼の読みづらさは解消できなかったと言います。

「それで、あるときUDデジタル教科書体のことを知って、試しに教材のフォントを変えてみたんです。そしたら教材を見た瞬間、その子が『これなら読める！
②

おれ、バカじゃなかったんだ!』って。暗かった顔がぱあっと明るくなって、その顔を見たとき、私、思わず涙がこみあげてきてしまって。その場にいたスタッフ皆、今まで男の子が悔しい思いをしてきたのを知っていたから……。みんなで男の子の周りに集まって、泣いてしまいました」

その子が人知れず背負ってきたつらさ。思うように学べない環境が放置されてきたことへの申し訳なさ。そして支援者の方たちが、UDデジタル教科書体を見つけて、役立ててくれたことへの感謝。

男の子の話聞いたとき、私の心にさまざまな感情がどっとあふれ出てきて、思わず涙がこぼれそうになりました。

障害は、人ではなく、社会にある。(中略)

奥村先生は、大阪医科薬科大学LDセンターで、日本では数少ない「オプトメトリスト」として、発達障害の子どもたちのサポートをされている方です。

オプトメトリストは、欧米では国家資格として認められている視機能・視覚認知の専門家です。オプトメトリストが実践するビジョントレーニングとは、視機能や視覚認知に弱さがある人たちを支援する実践的プログラムのこと。

トレーニングによって視機能や視覚認知の改善を図ることで、視覚を効率よく使う能力を向上させるとともに、人が本来もつ集中力・判断力・情報処理能力など、さまざまな能力を発揮しやすい状態を作ります。

私が電話をすると、奥村先生はとても熱心に話を聞いてくださいました。

奥村先生だったら、UDデジタル教科書体の理念に賛同してくれるかもしれない。

そう感じた私は、「一度お会いして、私たちが開発した書体を見て、話を聞いてくれませんか?」とお願いして、一人で大阪のLDセンターに会いに行きます。

そして「UDデジタル教科書体が本当にディスレクシアの子どもたちにとって読みやすいのか、検証実験ができませんか?」と奥村先生にご相談しました。

奥村先生は、ひとしきり私の話を聞いてくださると、「そうした研究は重要だし、面白いね」と言ってくださりました。

こうしてディスレクシアの子どもたちに対して、本格的な実証検証を行うことが決まったのです。

奥村先生が研究メンバーを集めてまず行ったのが、主観的な「読みやすさ」の検証です。(中略)

さらにこの実証実験は、2019年にも、奈良県生駒市内の一般小学生116人を対象に実施されました。その結果、やはりUDデジタル教科書体のほうが読み速度が速く、正答率も上がるという結果が得られました。

いずれの実証実験でもよい結果が得られたことに、私はほっと安堵^{あんど}のため息をつきました。

特に一般の小学校の子どもたちに対してもよい結果が得られたことは、ユニバーサルデザインの面目躍如^{注4)}を果たせた気分でした。

驚いたのは、全問到達者数です。一般的な教科書体ではわずか4人だったのに対し、UDデジタル教科書体では、なんと30人の子どもが最後まで到達できたそうです。奥村先生もこの結果には、大変驚いていました。

なお、奈良県生駒市ではこの実証実験の結果を受けて、市内全校の小中学校にUDデジタル教科書体を含む「公共団体向けUDフォントプラン(自治体や教育機関などの団体用年契サービス)」の導入が決まりました。

こうした結果を受けて、ロービジョンやディスレクシアの子どもたちのみならず、通常学級の子どもたちにとっても、UDデジタル教科書体は読みやすいことが、確かなエビデンスによって確認されたのです。

高田裕美(2023). 奇跡のフォント—教科書が読めない子どもを知って—UDデジタル教科書体開発物語 時事通信社 (一部改変)

注1：ディスレクシア(発達性読み書き障害) DSM-5-TR™ 精神疾患の診断・統計マニュアルでは読字不全を伴う限局性学習症(Specific Learning Disorder)をさす。

注2：ロービジョン 筆者によれば、景色がぼやけて見えたり、視野の一部が欠けて見えたり、眩しく感じたりする弱視のこと。

注3：UD ユニバーサルデザインの略。

注4：面目躍如(めんもくやくじょ) したことの首尾がよくて名誉なこと。

問 1 筆者が、“隠れディスレクシア”と呼ぶのはどのような子か、300字以内で要約しなさい。^①

問 2 筆者が、『これなら読める！ おれ、バカじゃなかったんだ！』という話を聞いて涙がこぼれそうになったと述べているが、この男の子はどのような困難を抱え、どのような思いをもっていたかを、300字以内で説明しなさい。^②

問 3 この文章をふまえて、ユニバーサルデザインについて、あなたの考えを300字以内で述べなさい。